



第6章

岐阜市のまちなみ



1 長良川周辺

清流長良川の両岸は、鵜飼や岐阜城・岐阜公園のほかにも古いまちなみや異彩を放つ建築物など魅力的な散策スポットで溢れている。長良川や金華山などの自然を満喫しながら、これらのまちなか歩きを試みるのも面白い。



岐阜城から見た長良川

長良川温泉

清流長良川のほとりに点在する「長良川温泉」。泉質は単純鉄冷鉱泉(中性低張性冷鉱泉)で、赤褐色のにごり湯が特徴。リュウマチ性疾患、慢性疾患および苔癬たいせんに効果があるといわれている。ホテル・旅館では新鮮な鮎料理はもちろん、ヘルシーな薬膳料理なども堪能することができる。また、旅のプロが選ぶ「にっぽんの温泉100選(観光経済新聞社主催)」総合ランキングにおいて2011年度から毎年入選し、過去の最高順位は28位である。その他、「温泉総選挙2017(うるおい日本プロジェクト主催)」の女子旅部門において、1位となった。



川原町界隈

岐阜市において、江戸時代からの古いまちなみが最もまとまって残っているのが川原町である。明治24(1891)年の濃尾大震災や、戦争の被害を免れたため、江戸時代から明治時代の格子戸の商家・町屋が見られる。平成23(2011)年から平成29(2017)年にかけて、岐阜市が景観法に基づき川原町界隈の建造物14棟を「景観重要建造物」に指定した。「川原町」は、現在の湊町、玉井町、元浜町などの総称である。最初に川湊をつくったのは、斎藤道三とされ、それ以降水運が盛んになり、長良川上流からは木材・竹材・美濃和紙などが集まり、材木問屋や紙問屋が並んだ。



●景観重要建造物

地域の自然・歴史・文化などから見て、外景観上の特徴をもつ建造物や地域の良好な景観を形成する上で重要な建造物。

鵜飼い大橋

名称の「鵜飼い大橋」は、一般公募の中から決められた。斜張橋は、主塔は「鵜匠」を、ケーブル線は「手縄」をイメージして造られており、橋長は469m、幅員は28.3～29.1mである。



トピックス

岐阜芸妓

現在11人（令和8年8月現在）の芸妓さんが芸を披露している。平成3（1991）年には岐阜商工会議所を中心にして岐阜芸妓振興会が発足し、芸妓さんを支援するようになった。毎年「岐阜をどり」を開催しているほか、平成20（2008）年から「道三まつり」の行列に手古舞を披露するようになった。検番でもある芸妓組合の事務所には稽古場があり、芸子さんたちが毎日のように三味線、踊り、長唄、小唄、清元、鳴り物（笛、太鼓）などの稽古に励んでいる。普段は、長良川周辺の旅館や舟上、柳ヶ瀬の飲食店などで活躍している。

ぎやくすい ひ もん 逆水樋門

川原町は、以前大雨で長良川が増水すると浸水被害を受けやすかった。そこで、忠節用水に逆水樋門を設置し、長良川本流による浸水を防ぐようにした。



ロボット水門

昭和初期、鏡岩に忠節用水が付け替えられた際、水防・放水量調節のために造られた。改修時に頂部に円錐が加えられ、丸い窓と共にロボットのような愛嬌のある外見となり、「ロボット水門」と呼ばれ親しまれている。岐阜県近代化遺産に選ばれている。



湊コミュニティ水路

「湊コミュニティ水路」は、長良川の清流を引き込んだ忠節用水の放水路沿いに設けられている。藤棚をくぐる散策道・デッキ・ハツ橋・滝組前の沢飛石・親水階段・玉石・季節に応じた植栽などを配し、水に親しめるようになっている。水路自体も魚の棲める深みをつくるなど配慮がされている。岐阜市内には他にも、清水川、早田川、西野町等にコミュニティ水路がある。



世界イベント村ぎふ

長良川河畔には、長良川国際会議場、岐阜メモリアルセンター、長良川スポーツプラザなどがあり、総称して「世界イベント村ぎふ」と呼ばれている。個性的な施設が集まった、10万人規模のイベント複合施設である。



長良川国際会議場

長良橋下流の右岸にある国際コンベンション施設で、都ホテル 岐阜長良川に隣接している。設計は世界的に著名な建築家・安藤忠雄氏^{あんどうただお}で、巨大な卵を抱いたかのような外観は、ひととき異彩をはなっている。メインホールは、会議・講演会・コンサート・演劇・ファッションショーなど多彩なイベント・コンベンションを可能にするため、舞台や客席が変化する可動床システムを採用している。



ぎふ木遊館

岐阜県の豊かな森林の恵みを体感し、森林に誇りと愛着を持ち、守り育てる人材を育む「ぎふ木育」を推進するため、「遊び」「学び」「交流・連携」「創造」「発信」のサービスを楽しむことができる総合的な拠点として令和2（2020）年にオープンした。

館内には、県産材でつくった10種類の大型遊具や100種類以上のおもちゃで子どもからおとなまで幅広い年齢が一緒に遊ぶことができる「木育ひろば」や、2歳未満の子どもとその保護者専用の「赤ちゃんひろば」などがあるほか、森の恵みを使ったものづくりやふれあい遊び等を体験できるさまざまな木育プログラムを実施している。



トピックス

FC岐阜

平成13（2001）年から活動をスタートしたサッカーチーム「FC岐阜」は、平成19（2007）年12月3日にJリーグ入会が承認され、岐阜県内初のプロチームとなった。岐阜メモリアルセンター「ヒマラヤスタジアム岐阜」を本拠地としている。



“FC 岐阜公式マスコット
キャラクター ギッフィー”

岐阜スーパース

岐阜スーパースは、平成15（2003）年から活動しているバスケットボールチーム。平成30（2018）年にBリーグ入会が承認された。O K B ぎふ清流アリーナを本拠地としている。



“岐阜スーパース
公式マスコットキャラクター
SPARKY - スパーキー -”

2 JR岐阜駅周辺

岐阜駅北口駅前広場は、県都岐阜市の玄関口にふさわしい魅力あるまちづくりを進めるため、平成21（2009）年に整備した。

当広場は、約26,500㎡と全国有数の面積を誇っており、この広大な面積を活用し、交通結節点としての機能強化のみならず、にぎわいの発信基地として人が集い、そして駅から街へと人の流れを創り出すため、歩行者用デッキ等の施設を効率よく配置している。

また、広場の中央部やデッキの上には、イベントなどに利用できるにぎわい空間を設けるとともに、「杜の駅」のコンセプトのもと、県内に自生する桜をはじめとする様々な樹種を植栽し、緑豊かでゆとりある空間を形成している。

現在広場では、毎年恒例のイベントが定着し、週末を中心に開催される様々なイベントにおいても多くの市民が参加し、にぎわいの創出に大きく寄与している。



JR 岐阜駅北口駅前広場

黄金の織田信長公像

平成21（2009）年9月に、岐阜市制120年を記念して、市民の寄付によりJR岐阜駅北口駅前広場に「黄金の織田信長公像」が建立された。台座までの高さは約8m、像の高さは約3mで金箔3層張りとなっている。

マントを羽織り、右手に種子島（鉄砲）、左手に西洋兜を持ち、まっすぐ前を見つめる「黄金の織田信長公像」は、常に時代の最先端を歩き「変革」を目指した信長公の姿を象徴しており、都市再生を図る岐阜のまちの未来を表現するものとなっている。



JR岐阜駅南口

金華山をはじめ岐阜県内の自生樹種の「緑」などを基本テーマとする北口に対し、JR岐阜駅南口は飛山濃水（飛驒の山々、濃尾の水）を基本テーマにし、風わたる駅前広場は樹木の緑があふれ、せせらぎの流れがさわやかなアプローチ空間をうみだすとともに、利用者に快適さと便利さを提供している。



丸窓電車

丸窓電車（モ510形）は、大正15（1926）年に製造され、戸袋の窓が楕円形であることから「丸窓電車」の愛称で多くの市民や鉄道ファン等に親しまれ、平成17（2005）年に路面電車が廃線になるまで市内を中心に運行していた。

平成31（2019）年3月28日に市の重要文化財に指定されており、令和元（2019）年にJR岐阜駅北口駅前広場の完成10周年を節目に、平成18（2006）年より保存されていた金公園から駅前広場に移設された。



アクティブG

JR岐阜駅高架下にある、ファッションやアート、クラフト、デザインの分野で活躍する匠たちが集う「TAKUMI工房」を中心とした施設で、「見る」「買う」「創る」という3つの魅力を備えたアート拠点となっている。食の楽しみが満喫できる「楽市楽座」やスポーツクラブも備えた交流空間として注目を集めている。



ハートフルスクエアG

市民が気軽に利用できる生涯学習の拠点。JR岐阜駅の東側に隣接して、1階には岐阜市立図書館分館、体育ルーム、あんしんつながりステーション、2階には生涯学習センター、女性センター、岐阜市平和資料室等が設けられている。また、ここには生涯学習・ボランティア相談コーナーもある。



岐阜市観光案内所

JR岐阜駅2階にあり、岐阜市の観光案内とともに、観光パンフレット・ガイドマップなどを配布している。案内所内には岐阜市の特産品の岐阜提灯や岐阜渋うちわなども展示してある。



鮎の駅・清水川

JR岐阜駅の南側を流れる清水川は水がきれいで水量も多いため、アユ・ギンブナ・オイカワなどが生息している。これらの魚を身近に鑑賞できる施設としてJR岐阜駅南口につくられたのが鮎の駅・清水川。川の延長100mの間、上下の二層構造とし、上段にせせらぎを創出、清水川にすむ魚が上れるように魚道を設置している。登り落ち漁の仕掛けなどを見ることができる。



清水緑地

JR岐阜駅南口周辺を含む加納地区において、都心緑地を創出する「清水緑地」が平成17（2005）年3月に完成。「アユが泳ぎ・ホタルが飛び交う都市緑地の創出」をテーマに、公園を「ホタルの杜、サクラ広場、親水広場、歴史散歩道」の4つに区分し整備した。面積は約2.2haに及ぶ。



岐阜シティ・タワー 43

JR岐阜駅前という利便性の高い場所にあり、岐阜市の活性化を促進する新たなシンボル。平成19（2007）年に完成した。住居を伴う複合型タワーとしては中部圏で一番の高さ（163メートル）を誇る。

岐阜市が所有する最上階（43階）のスカイラウンジには、レストランと、誰でも無料で楽しめる展望室がある。スカイラウンジへは、直通展望エレベーターで約45秒で行ける。



岐阜スカイウイング37

平成24（2012）年8月に岐阜シティ・タワー 43の北側に完成した超高層複合ビル。高さ135.89mである。

270戸の分譲マンションや商業施設が入る37階建の東棟、天然温泉を備えたビジネスホテルやオフィスが入る11階建の西棟、409台を収容する自走式立体駐車場の3棟で構成され、2階の高さで歩行者用デッキによりJR岐阜駅と直結した利便性の高い施設である。



岐阜イーストライジング24

JR岐阜駅北口の東側に、平成31（2019）年1月に完成した超高層ビル。高さ95.24mである。商業施設、福祉施設、住宅で構成されており、2階には岐阜市リモートオフィス（Neo work-Gifu）が入る。

JR岐阜駅と歩行者用デッキで結ばれ、名鉄岐阜駅、JR岐阜バスターミナルに近接する好立地にあり、駅周辺に賑わいを生み出している。



柳ヶ瀬グラスル35

令和5(2023)年3月、柳ヶ瀬に完成した高さ132.64m、地上35階建の商業・住居複合の超高層ビルである。「グラスル」は、GLASS(ガラス)、GRASS(緑)、CASTLE(城)を掛け合わせた造語で、次代の柳ヶ瀬のランドマークになってほしいとの願いが込められている。

岐阜市の公益的施設として、3階に中保健センターと柳ヶ瀬健康運動施設「ウゴクテ」、4階に柳ヶ瀬子育て支援施設「ツナグテ」が整備され、幅広い世代が集まり、柳ヶ瀬に新たな賑わいを生み出している。

岐阜市柳ヶ瀬健康運動施設ウゴクテには、トレーニングルームやフィットネススタジオ等があり、それらを利用することや、健康づくりに関する教室に参加することができる。

柳ヶ瀬子育て支援施設ツナグテには、シビックプライドを育むため岐阜の地名にちなんだ遊具、親子で絵本の読み聞かせができるスペース、未就学児を一時預かりできる場所などが整備されている。また、子ども向けの様々な体験プログラム、子育て世帯向けに保育士への育児相談などが行われている。



セントラルパーク「金公園」

都心に広がる憩い、うるおい、にぎわいの空間として、セントラルパーク「金公園」が、令和5(2023)年3月にリニューアルオープンした。

新しい金公園には、緑の拠点となる広大な芝生広場をはじめ、イベント空間や、公園全体を見渡すことができる「小高い空間」、訪れる人に潤いを提供する「噴水」、ほどよい広さの居心地よい空間などを整備しており、公園を訪れる人が主役となり楽しむことができる。



じゅうろくプラザ（岐阜市文化産業交流センター）

JR岐阜駅と歩行者用デッキで結ばれ、駅から徒歩数分に位置する文化産業交流施設。定員600人のホールはファッションショーなどにも利用できる。また、5階の各会議室はバンケットサービスにも対応可能。そのほか各種研修室・スタジオ・展示ギャラリーなどを備えている。

正式名称は「岐阜市文化産業交流センター」だが、株式会社十六銀行がネーミングライツ(命名権)を取得し、「じゅうろくプラザ」の名称で親しまれている。



柳ヶ瀬

JR岐阜駅から少し足を伸ばせば、そこは明治時代から歴史をもつ全国有数の繁華街「柳ヶ瀬」。数百軒の商店や飲食店があり、ショッピング、アミューズメントなどたくさんの施設が揃う。昭和41(1966)年に発売された美川憲一みかわけんいち氏が歌う「柳ヶ瀬ブルース」の大ヒットによって、柳ヶ瀬は一躍有名になった。柳ヶ瀬通りには歌詞が書かれたタイルが路面に埋め込まれている。



岐阜市シェアサイクル G i f u - r i d e

観光振興に資する二次交通手段を確立させ、さらなる誘客を図り、またその副次効果として、市民の利用が促進されることを目的として、令和4（2022）年から運用を開始した。市内に29ポート（令和8年9月現在）あり、利用者は専用のアプリで24時間シェアサイクルを借りることができる。

※令和8年9月現在

自転車の種類	従量料金		定額料金
	15分あたり	24時間あたりの上限	1日あたり
電動アシスト付き	50円	1,600円	1,000円
その他	30円	960円	600円



岐阜市観光ラッピングトラック

関東・関西方面を運行する中・遠距離トラックの荷台部分に、岐阜市の観光資源である「ぎふ長良川の鶺鴒」や「岐阜城」などをデザインしたシートを貼った「岐阜市観光ラッピング」が平成24（2012）年8月に完成した。令和8年8月現在、10トントラック1台、4トントラック1台の計2台が走行している。



GIFU HEART BUS

「自動運転バスがいつも走っているまち」の実現に向け、自動運転バスの5年間（2023年11月25日～2028年3月31日）の継続運行を行っている。岐阜駅から岐阜市役所までの中心部ルート（毎日運行）と、岐阜駅から川原町や岐阜公園などの観光地を周遊する岐阜公園ルート（土日祝日のみ運行）がある。原則予約制で、運賃は無料である。

人口減少や高齢化が進行する中で、持続可能な公共交通ネットワークを確保するため、運転手不足や安全対策などの様々な課題に対する一つの解決策として、公共交通への自動運転技術の導入を目指している。令和8（2026）年1月からは、中心部ルートにて、障害物回避や車線変更を自動で行うレベル4（特定条件下での完全自動運転）に対応した新たな車両を導入している。

GIFU HEART BUSという愛称や車両等のデザインは、連節バス「清流ライナー」をはじめ、JR九州のクルーズトレイン「ななつ星 in 九州」など、公共交通のデザインに数多く携わる水戸岡鋭治氏によってデザインされている。



信長バス

平成24（2012）年7月16日から、岐阜市内を走るバス路線「市内ループ線」で「信長バス」の運行を開始し、現在は7両が運行している。

同年9月下旬から開催された「ぎふ清流国体・ぎふ清流大会」の参加者、関係者などに広く信長公のまちづくりをPRするために導入された。

現在、運行している車両は2代目で、車体側面にはアニメ調の織田信長公が描かれており、岐阜を訪れる観光客を中心に親しまれている。



清流ライナー（連節バス）

まちの新たなシンボルとして、ひと際目立つ赤色のボディで全長18mのバスが岐阜駅から各方面に走行している。

このバスは「連節バス」と呼ばれる中央の節の部分が折れ曲る構造のバスで、通常のバスの約2倍の輸送能力がある。また、低床で車内に段差が無く高齢者や車いすの方でも楽に乗り降りできる。

愛称は「清流ライナー」といい、平成23（2011）年3月からは岐阜大学病院線、平成24（2012）年8月からは市内ループ線、平成26（2014）年3月からは下岩崎線、令和7（2025）年4月からは忠節下岩崎線に導入された。

令和7（2025）年4月には、車両更新にあわせて、環境性能や安全性能に優れ、水戸岡鋭治氏によってデザインされた新たな連結バス「GIFU RED OMNIBUS」が2両導入された。



路面電車

明治44（1911）年に美濃電気軌道として開業し、昭和30年代には岐阜圏域70kmを超える路線網となり、岐阜地域の輸送を支えた。

最終的には岐阜市と関市、北方町、本巣市、大野町を結ぶ基幹公共交通として、名古屋鉄道株式会社が岐阜市内線、揖斐線、美濃町線合わせて計36.6kmを運行していた。

通勤・通学を中心に多くの利用があったが、利用者の減少が続き、名古屋鉄道が赤字を理由に撤退を表明し、平成17（2005）年3月で全線が廃線となった。



岐阜インターチェンジ（IC）

岐阜ICは、令和7（2025）年4月6日にETC専用料金所として供用開始した。

岐阜市北西部の岐阜大学医学部附属病院の北側に位置し、岐阜ICへのアクセス道路として、忠節橋通り（都市計画道路「岐阜駅城田寺線」）、都市計画道路「長良糸貫線」、都市計画道路「折立大学北線」を岐阜県と岐阜市が協力して整備を行った。



岐阜三輪スマートインターチェンジ

東海環状自動車道岐阜三輪スマートインターチェンジは、関広見IC～山県IC間にあり、岐阜市の北の玄関口として令和2（2020）年3月20日に開通した。

主要地方道北野乙狩線と接続しており、ETC車載器を搭載した車両のみが通行可能で24時間利用できる。

岐阜三輪スマートインターチェンジの設置により、岐阜ファミリーパークの集客圏域拡大や、飛騨方面・東濃方面との都市間連携強化などの整備効果が期待される。



道の駅「柳津」

岐阜県内で44番目に開駅した道の駅。施設整備にあたっては、既存のケヤキや桜の木を極力残した緑の中にある駐車場、建物の屋上緑化、太陽光発電を一部取り入れた環境に優しいエネルギーの導入など、環境に配慮している。情報館にある大型ディスプレイからは、道路情報や気象情報、災害情報などが提供されるほか、観光情報を知ることができる。物販館では、柳津地区の特産品の佐波いちごや、いちごの加工品などが販売されている。

また、展望施設もあり、施設の高さ8.712mは「やないづ」の語呂合わせになっている。



3 中山道

江戸時代のはじめ、徳川幕府が整備した五街道の1つが中山道。うち、岐阜県を横断する道は美濃中山道と呼ばれる。岐阜市内は12kmほどの道程で、美濃中山道最大の加納宿と長良川右岸(西岸)の河渡宿の2つの宿場町があり、史跡や物語が残されている。



中山道

加納宿

中山道の宿場町でも数少ない城下町で、美濃中山道十六宿^{*}の中で最大規模の宿場だった。現在でも、随所に道標や碑があり、往時を偲ぶことができる。

(※平成17年の市町村合併により、長野県山口村が中津川市と越県合併したため、岐阜県内の旧宿場町は馬籠宿を含む十七宿となったが、馬籠宿は木曾路であるため、美濃中山道としては十六宿となる。)

■切通陣屋跡

名鉄切通駅の近くの中山道沿いに切通観音がある。あたりは元加納藩主であった磐城平藩の安藤信明(信成)が切通陣屋を置き、この一帯をはじめ方県郡や本巢郡にあった自領を支配したところ。ここから加納の茶所にいたる中山道の沿道には、今も古い町屋があり、懐かしい雰囲気をかもしだしている。

■細畑の一里塚

徳川幕府は、当時の主要道であった中山道、東海道などの五街道に里程標として1里ごとに塚を築かせ、そこに榎などの木を植えさせた。それが一里塚で、細畑の一里塚は中山道沿いに南北が対になって残っている珍しいもの。戦時中には荒れ果てていたが、戦後に整備し、現在の姿を保っている。

また、河渡などには一里塚の跡がある。



かがみいわ せき ひ 鏡岩の石碑

江戸の大相撲でならした鏡岩浜之助の子、2代目鏡岩が悪行を反省して、茶の接待所を建て「ぶたれ坊」という像を置いた。「ぶたれ坊」は旅人に棒で打たせ罪滅ぼしを図ったといわれるもので、現在は加納の妙泉寺に移されている。また、茶をふるまったので、この地を「茶所」というようになった。鏡岩の碑の傍らには東海道や伊勢、熱田方面を案内する道標が残っている。



加納天満宮

すがわらのみちざね

菅原道真をまつた古い神社で、慶長6（1601）年に現在の地に移された。加納藩代々の城主の信仰も厚く、今も「加納の天神さま」として親しまれている。拝殿には牧田種磨の「三十六歌仙、六歌仙及び松梅額面」も掲げられている。例祭や初夏のみそぎ祭り、提灯祭りなどには多くの参拝者で賑わう。



ががしまこうぼう おっしん じ

鏡島弘法 [乙津寺]

木造千手観音立像をはじめ、国指定の重要文化財を三休所蔵する古い寺。一般には「鏡島の弘法さん」として親しまれ、毎月21日の縁日には多くの人々で賑わう。寺の歴史は古く、弘仁4（813）年弘法大師が嵯峨天皇の命を受けて建立したと伝えられている。その後、長良川の大洪水や戦火などで荒れ果てたが、天文14（1545）年に鏡島城主・石河駿河守光清によって再興された。昔から京都の東寺、神奈川の川崎大師とともに日本厄除け三弘法の一つとされている。



きゅううん じ 久運寺

加納天満宮の西側にある寺で、天正年間（1573～1592年）作の仮名草子「因果物語」にも登場する。この寺では、寛文5（1665）年、加納藩主の松平光重がこの寺の住職の玉葉和尚に「お茶壺道中」の本陣を命じたが、それを断ったため住職を追放処分にするという事件がおきた。当時は、幕府への献上茶を運ぶ道中行列は大名行列より権威があり、大名や沿道の人々にも恐れられていた。

中山道加納宿まちづくり交流センター

旧加納町役場（岐阜市加納本町）の跡地に、令和2（2020）年10月14日より開館。加納宿を中心とした中山道沿道の歴史文化の継承を図り、地域のまちづくり活動や地域交流の促進の場として設立。

まち歩きなど中山道を訪れる方へのトイレの提供や、休憩スペースとしても利用できる。また、会議室も備えており、使用することができる。



ごうどじゆく 河渡宿

河渡宿は長良川の渡しで栄えた宿場。当時は洪水に苦しめられており、宿場全体の地上げ工事を行い、その記念碑がかつて「河渡の一里塚」があったあたりに残っている。河渡宿は、戦時中の焼失や、長良川の河川改修により往時を偲ばせる旧家は残っていない。



ばとうかんのんどう あいぜんどう 馬頭観音堂 [愛染堂]

美濃十六宿最大の石造り観音像で、高さは1.7m。天保13（1842）年、中山道を通行する旅人や荷を運ぶ牛馬の安全を願って、河渡宿の人々がお金を出し合って造ったもの。当時は河渡の渡しの脇に大きなお堂が建てられ、舟を待つ人々の休憩所としても利用されていた。しかし、現在は、新しい堤防ができたため長良川堤の住宅地の一角に移設された。



4 その他の街道

岐阜市内には、五街道の中山道のほかにも鮎鮠を江戸幕府に献上するのに利用されていた「御鮎街道」や中山道・垂井宿と東海道・宮宿を結ぶ脇街道である「美濃路」などの街道が通っており、当時の人々の営みを支えていた。



御鮎街道

おすしかいどう 御鮎街道

江戸時代、尾張藩が岐阜の特産品の一つとして鮎の熟鮎^{なれずし}を幕府に献上する際に利用されていた街道である。鮎の熟鮎は他の藩からも献上されていたが、岐阜のものが量・質ともに最も優れていたといわれる。元来の道は、岐阜街道で、地域の愛称として「御鮎街道」、「鮎鮠街道」などと呼ばれる。御鮎街道と認識されているのは、稲沢市内で美濃路と合流するまで(約26km)が一般的である。岐阜県内では、笠松湊跡までが街道である。起点は鵜飼が営まれる湊町付近、御鮎所のあった益屋町付近という二説がある。当時の道のほとんどが残されており、現在も利用されている。

みのし 美濃路

東海道の宮(熱田)宿から、中山道の垂井宿を結ぶ全長約57.5kmの街道。慶長5(1600)年、徳川家康が関ヶ原の戦いの凱旋の帰路、この道を通ったことから「お悦び街道」とも呼ばれる。将軍家をはじめ、朝鮮通信使、琉球使節などの人たちも往来した。

とうさんどう 東山道

五畿七道の一つで、古代の律令時代に整備された官道。近江・美濃・飛騨・信濃・上野・下野・出羽・陸奥を通る。岐阜市地域のルートは、又丸、木田、正木、長良を通っており、長良あたりに方県駅を置いたといわれている。

ぐじょうかいどう 郡上街道

加納宿から郡上八幡、白鳥を経て、石徹白^{いとしろ}に至る街道。古くは白山信仰の道でもあった。

※この他にも、岐阜市内には「御成街道(尾張藩主が岐阜町来訪のおり通った道)」や「京道(鏡島湊から岐阜町への道)」などの街道もある。